

西洋社会における浄土真宗独自の可能性

アルフレッド・ブルーム

仏教ならびに浄土真宗に導かれるに到った私の経験について詳しく述べる時間はないと思う。しかし、原理主義的な一人のバプティストとして出発し、一連の体験を通してついには浄土真宗の中に故郷^{ふるさと}を見い出すに至ったとだけ言っておくこととする。自己についてより現実的に理解しようとし、そして人生へのアプローチを個人としてより満たされたものにしようとしている人たちにとっての選ぶべき道として、私がアメリカ社会における浄土真宗独自の可能性について述べようとするのは、このような背景によるのである。

私に許された時間の中では、アメリカ社会における浄土真宗の普及にとって意味があると思う二、三の点についてあげることはできないのである。まず、浄土真宗は在家のための宗教である。親鸞によって説かれた真宗の教えは、世俗に生きる人・農民・商人・獵師・町人といった、出家して自分たちの社会的な義務と決別できなかつたり、高僧たちが到達した高尚な精神的体験を得ることができない人々に向けられた。親鸞は、日常生活の状況の中でも精神的体験の深みをもちうる方法を提示することによって、当時のエリート主義的宗教に課題を投げかけたのである。

親鸞の救済の道についての理解は、対立と暴力の根底にあるあらゆる種類の罪惡によって汚された根絶しがたく煩惱に苛まれている本性の自覚をもってはじまるのである。

仏教は利己主義や我執が遍満していることを常に認めてきたのであるが、こういった考えは、しばしば消極的で悲觀的だとみなされる。親鸞は、それを宗教的生活ならびに行について、その理解の変更を迫られるほど強烈に体験した

わけである。そこで、私は自分自身の生活において明らかにされたのと同様に彼の考えを現実的に理解したい。親鸞は、人々に自己を深く内省し、自らを精神的に束縛している鎖に気づくよう呼びかけた。この内省は、仏・菩薩の絶対的な清浄さという仏教の理想によって触発される。それは究極的には『仏説無量寿経』に述べられている阿弥陀仏の物語に根拠を置く。人は自己の内にある罪惡の深さに気づけば気づくほど、それにも関わらず、命を支え育む阿弥陀仏の慈悲と智慧に気づくようになるという精神生活における論理を、親鸞は見通したのであった。惡の暗闇は、この罪惡を包む雲を打ち破る阿弥陀仏の慈悲の光によって破られる。親鸞の理解は我々が自分自身の内なる陰の部分に気づくことを認めるわけであるが、それは陰の部分を抑圧するためではなく、より深い理想によってつつまれることによって、慈悲と智慧とが陰の部分にとって代わるためなのである。

救済方法に関する親鸞の考えから導き出される重要な結論がいくつかある。第一は絶対他力であるが、自身の外の力すなわち救済を授けてくれる神が存在するという意味ではなくて、あらゆる生き物との相互依存と連帯の原理を真摯に受け入れるという新たな人生観をもつ中で、自分自身の中で明らかになってくる力という意味で他力なのである。阿弥陀仏の四十八願は、救済の相互依存性と個人性(それ以上分割できない個としての性格)とを劇的な形式で表現していて、これらの原理はその物語の中で明らかにされている。

親鸞の了解によれば、宗教そのものは人の精神的な発展にとっては危険なものとなりうる、というのが第二の結論である。自分自身の努力奮闘によって覚りに至るのだという信念は、価値の比較対照や独善やエリート意識につながるものであり、後の浄土真宗をも含めあらゆる宗教に伝染する。親鸞の他力の考えは、自己の完成と利益を追求する宗教から、感謝と報恩の宗教へと変革することによって、宗教的な生き方に対する理解を変えた。つまり、宗教上の信仰が、信仰そのものにおける目的となり、他の目的の道具であるとか手段ではなくなった。親鸞によると、人は自分の生き方を抱擁してくれる慈悲に気づくことによって宗教的になるのであり、その場合の慈悲を感謝と分かち合いという形で表現する。宗教上の信仰の本質は利他主義であり、人は慈悲を他人に伝え

るために生きているのである。

さらにもう一つの結論としては、日本の民俗宗教に付随する、人を操り抑圧するような宗教的恐怖を親鸞は克服したことである。そして、怨霊や神々を恐れたり畏れたり神頼みする人々よりもむしろ信心ある人に、神は深々と頭をたれて礼拝するのだと、親鸞は書き記している。この点において、仏教の長い伝統は民族宗教の慣習に巻き込まれてしばしば影が薄くなってきていたが、親鸞はその伝統に沿っていたのである。自分には宗教上の特別な地位や能力があると言っているリーダーたちに対する無批判で熱狂的でしばしば狂信的な信奉に対抗するためにも、今日親鸞は重要である。親鸞は、自らは愚禿²ということ以上に何も言わず、僧であるとも俗であるとも言わなかったのである。

私は、宗教的探求の過程で浄土真宗の教えに出会い、個人的に親鸞の教えが持つ救済の効果を体験することとなった。日米両国の歴史的状況からして、まだそういった救済の効果を得ていない分、浄土真宗はアメリカ社会においてより大きな可能性を持っていると私が強く思うのはこのような理由からである。もし、これまでの限界が超えられ親鸞の精神が自由に自らの精神そのものを表現しうるのであれば、このアメリカ文化における将来の宗教的發展の中に、浄土真宗の重要な役割があるであろう。親鸞は道徳主義的でも形式主義的でも権威主義的でもましてやエリート主義的でもなかった。

1

西洋という文脈^{コンテキスト}の中で、私は、親鸞の阿弥陀仏についての理解がキリスト教の伝統の中で発展してきた神への信仰に代わりうるものとして重要視している。絶対存在、創造主たる神、というよりむしろ創造と人間世界から離れている阿弥陀仏は、広大無辺の慈悲と智慧とを象徴するような“脱構築された神”として対照的に考えられるかもしれない。そして生命力は伝統的キリスト教の神学に込められている実体的・形而上学的・客観的な意味合いがなくとも我々を覚りにまで至らしめるのである。神の場合とは異なり阿弥陀仏の存在証明をする必要はない。阿弥陀仏は、象徴^{シンボル}という言葉の中でも最も深い意味での宗教的象

徴なのである。そしてその阿弥陀仏は、我々の精神的ヴィジョンを我々自身の存在論的意味に向ける。つまり、相互依存・おもしろ・社会、いくばくかの慈悲・愛なしに我々は生きられないということに目を向けさせるのである。阿弥陀仏は、我々の存在の深いところで自覚される。帰依の一要素として阿弥陀仏の名を唱えるということは、魔術的ではなく、我々の生命のより深い実在に注意を向けさせるための手段なのである。阿弥陀仏をめぐる発せられる我々の言葉は有神論的に聞こえるが、擬人的表現というものはあらゆる宗教的表現の中にいたるところに含まれているもので、その理由は、人間的な人格が我々の知り得る最も信頼し得る実在だからである。ただ、仏教は、自己中心的な関心から生まれた我々人間の概念と、概念と言葉とを越えた実在の究極的性質とを実体的に同一視してはならないと警告している。浄土真宗は、生き方についての自力的な思想に反対するだけでなく、究極的原理としての有神論に反対する。キリスト教が歴史の結果として宇宙論的位置づけをしたのに対し、仏教とくに浄土真宗は存在論的である。つまり、仏教も浄土真宗も世界の本质について言明しようとはしないが、生き方や人間関係そして存在の意味を評価するための見通しを提示しようとするのである。

2

浄土真宗の思想的な背景には、非二元論的な大乘仏教の伝統がある。この文脈において、真宗は、西洋の宗教やイスラム教に見られるような、肉と霊、聖と俗、科学と宗教といった固定的な区別を克服する。

3

親鸞の洞察の重要な成果は、共同体のあり方に関するものであった。階級制をもち先祖崇拜に傾きがちな日本の社会や宗教の影響を受けていたにも関わらず、親鸞は同朋同行として知られる共同体を設立した。親鸞は、「弟子一人ももたずそうろう」といって万人の精神的平等を示し、弟子という言葉の使用を拒絶した。そして「父母の孝養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず」と言明し、「一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり」

と教示して先祖崇拜を退けたのである。⁴親鸞は平等主義的で普遍主義的であった。親鸞の主著である『教行信証』には、人間のいかなる形の差別をも超越するような信の本質に対する彼の精神的洞察力を簡潔に言い表した一節(大信海)⁵がある。もし、この一節の意味が理解されたならば、浄土真宗は、人種・性・性的アイデンティティに関わる問題を取り扱うときにも治癒と調和の力になるであろう。もちろん親鸞の時代には、これらの問題はそういう形では存在してはいなかったのだが。

結論として、親鸞と浄土真宗は、実在に対する宇宙普遍的な見方、自我の状態に関する深い理解、宗教体験の根拠と意味深い存在の基礎を持ちながら、宗教的存在についての包括的理解を提示するのである。

それ故に、浄土真宗は社会における治癒の源泉なのである。無条件の慈悲によって包容された自己に対する浄土真宗の現実的な見方は、自己の受容とそれと相関関係にある他者の受容とを促す。それは、社会的に強いられた差別を超えて、同行の同朋を形成していく和解の信仰である。親鸞の教えは、宗教における、抑圧的・競争的・道徳的・形式的もしくは権威主義的態度や構造を支持するものではない。その教えは、宗教的畏怖からの自由を与えつつ、人につけこみ人を威圧するような宗教的信念と行とに対抗し、そしてある種の宗教的信念に基づく自我の侵入の基礎を取り除くのである。現代社会において、親鸞の方法には、ばらばらで望みのない世界に治癒をもたらすという独自の可能性がある。もし、親鸞の精神が、その教えを標榜する同朋の中で本物となるならばであるか。

訳者ノート

国際仏教研究班はこれまで数々の研究会を重ねてきたが、1996年5月23日にはアルフレッド・ブルーム (Alfred Bloom) 氏を講師としてお招きし、*The Unique Potential of Shin Buddhism in Western Society* というタイトルで御講演いただいた。本稿はその際提出された発表資料の全訳である。

アメリカ社会において浄土真宗がいかなる意味を持ち得るか、また、浄土真宗がア

アメリカ社会においていかなる意味を持たなければならないかに関する提言である。この問題意識は、すでに *Shinran's Way in Modern Society* (The Eastern Buddhist New Series Vol. 11 No. 1, 1978) などの論考において垣間見ることができ、ブルーム氏の真宗研究における一貫したテーマであると言い得る。一方、氏が真宗研究に従事するようになった経緯について書きとめたものとして、*A Spiritual Odyssey: My Encounter with Pure Land Buddhism* (Buddhist Christian Studies Vol. 10, 1990.) と題されたごく短かなエッセイがあり、「浄土真宗には西洋社会において担うべき独自の役割がある」と主張するに至る氏自身の思想的遍歴をも具体的に窺い知ることができる。あわせて参照していただきたい。

ここに発表資料の全文を紹介することで、浄土真宗が現代において果すべき役割について再考する契機となり、またその一助となれば幸いである。

訳者注

- 1 『浄土和讃 現世利益和讃』（定本『親鸞聖人全集』第二巻，法蔵館，1969）pp. 61-67.
- 2 『教行信証』（定本『親鸞聖人全集』第一巻，法蔵館，1969）p. 381.
- 3 『歎異抄』（定本『親鸞聖人全集』第四巻，法蔵館，1969）p. 9.
- 4 同上 pp. 8-9.
- 5 『教行信証』（定本『親鸞聖人全集』第一巻，法蔵館，1969）p. 132.

（翻訳 箕浦曉雄）